

氏 名	井 波 健 一
	い なみ けん いち
学位の種類	医 学 博 士
学位記番号	論 医 博 第 197 号
学位授与の日付	昭 和 40 年 6 月 22 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	Effect of the Spleen Function on the Thyroid Gland (脾臓と甲状腺機能の相互関係に関する研究)
論文調査委員	(主 査) 教 授 木 村 忠 司 授 教 荒 木 千 里 教 授 伊 藤 鉄 夫

論 文 内 容 の 要 旨

実験目的：脾臓はほとんどすべての動物に見られるにもかかわらず、あらゆる器官の中で最も未知の器官である。脾臓機能の内分泌学的性格は、この器官の生理および病理において最も議論の多い問題であって脾臓の骨髓に対する影響は早くから注目され、またその他にも脾臓の内分泌学的性格に関する観察や研究は尠くないが、この問題はまだ確立されていない状態である。一方脾臓と内分泌器官の相関に関する研究ははるかに尠い。著者は臨床的観察から脾臓と甲状腺の相関を想定し、これを立証するために臨床的並びに実験的研究を行なった。

実験方法および結果：

第一篇 脾腫患者の甲状腺のカテコールアミンによる急性一過性腫脹

1. 褐色細胞腫患者の高血圧発作時、初期バセドウ氏病患者の精神興奮時などに急性一過性の甲状腺腫脹が観察されることがあるのは諸家の報告に見られるが、著者は2名の脾腫患者に Frey 氏試験のためカテコールアミンの注射を行なった際に同様の甲状腺の一過性腫脹が起こるのを観察した。この現象は剔脾後には見られなくなり本現象と脾臓との関連を想定せしめた。そこで脾腫患者と対照について本現象を検討したところ、対照例においては1例も本現象が見られなかったのに比し、脾腫患者13例中5例において本現象が観察され剔脾後には見られなくなった。

2. 生検によって脾腫患者の甲状腺組織像を見ると著明な機能亢進または低下の像は見られなかったが、全例において汙胞間毛細管の充盈が見られ対照との間に明らかな差異を認めた。甲状腺腫脹の観察された褐色細胞腫患者の甲状腺においてもまた汙胞間毛細管の充盈が見られることから、この充盈は甲状腺の急性腫脹の発現に意義を有するものと考えられる。

3. アルブミン感作法によって家兎に実験的脾腫を作成するとその甲状腺にも同じく全例に汙胞間毛細管の充盈が見られた。しかもあらかじめ剔脾を行なって感作した場合には充盈が見られないので本所見は脾腫に起因すると考えられる。

第二篇 甲状腺 I^{131} 摂取率に及ぼす脾臓の影響

家兎において脾臓の甲状腺機能に及ぼす影響を I^{131} 摂取率を用いて検討した。

1. 剔脾後30日で摂取率はやや減少を示すが、50, 150, 270, 410日では著明な亢進が見られた。
2. 脾腫作成の目的でアルブミン感作を行なったが感作20日では摂取率はやや減少を示し、感作90日、すなわち脾腫発現例では著明な亢進が見られた。しかるに脾腫剔除例およびあらかじめ脾剔を行なって感作した例においても同様の亢進が見られ、脾腫の影響は明らかではなかった。

結論：以上の研究結果から脾臓は生理学的および病理学的状態において甲状腺に諸種の影響を及ぼしていることを証明し得たといえる。

論文審査の結果の要旨

脾臓機能の内分泌臓器的性格に関しては種々ろんぜられているが、まだ、真相は明らかではない。一方脾臓と内分泌器官との機能的相関に関する研究は非常に少ない。井波は臨床的観察から脾臓と甲状腺との機能的関連を想像して以下の研究を行なった。論文は2編からなる。

第1編、脾腫のある患者に Frey 氏試験のためカテコールアミンの注射を行なうと15例中7例において甲状腺の急性一過性腫脹がおこり、剔脾後にはこの現象がおこらなくなる。

このような患者の甲状腺を生検によって組織学的にしらべると全例に汙胞間毛細管の充盈が見られた。

アルブミン感作により作製した兎の脾腫においても脾の腫大とともに全例に汉胞間毛細管の充盈がおこる。しかるにあらかじめ脾臓を剔出した動物を感作しても甲状腺にこのような変化はおこらない。

第2編、甲状腺の I^{131} 摂取率におよぼす脾臓の影響を見ると、剔脾後30日で摂取率はやや減少し、50, 150, 270, 410日の長期にわたり以後は著明に摂取率の亢進が現われる。

以上の結果から脾臓は甲状腺の機能に種々な影響をおよぼしていることがわかる。

本論文は学術上有益にして医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。